群教セ	G02 － 02
	平23.243集

歴史的事象の意味を考える力を高める指導の工夫

― 歴史学習ガイドを使った「なぜ型学習」を取り入れて ―

長期研修員　　笠原　隆

《研究の概要》

本研究は、小学校歴史的分野の学習において、歴史学習ガイドを使った「なぜ型学習」を取り入れることを通して、歴史的事象の意味を考える力を高めることを目指したものである。具体的には、学習の手引きである歴史学習ガイドを使いながら、児童が「なぜ」で始まる学習問題を設定し、予想を立てた後、資料から発見した事実を基に予想を変更・修正する活動を繰り返して自分の考えをもち、その結果を関連付ける活動を行った。

キーワード　【社会－小　歴史的事象の意味　なぜ型学習　歴史学習ガイド】

Ⅰ　主題設定の理由

平成20年の中央教育審議会の答申では、「社会的事象の意味、意義を解釈すること」を一層重視する方向で改善を図ることが示された。それを受け、学習指導要領第６学年の能力に関する目標では、「社会的事象の意味をより広い視野から考える力（中略）を育てるようにする」と示された。また、平成23年度群馬県学校教育の指針でも、「問題解決的な学習過程において、一つの資料を様々な面から読み取ったり、複数の資料を比較・関連させたりするなど、社会的事象の特色や意味を資料に基づいて考える活動を充実」させることが示された。このように、社会科では、問題解決的な学習過程において、資料に基づき、社会的事象の意味について考えることが求められている。

協力校の実態を見ると、歴史上の人物名や重要語句を覚えることや、歴史上の人物が行った行動について調べることは行っており、「どのような」という事実を資料に基づいてとらえることはできている。しかし、「なぜしたのか」という目的や「なぜできたのか」という因果について、資料に基づいて考えることが苦手である。ましてや、歴史上の人物の行動や判断が、「当時の社会の変化や、後の時代にどのように影響を与えているか」まで考えることはできず、歴史的事象の意味を考える力は不足していると言える。これは、教師も問題解決的な学習をどのように進めるか迷い、理解させようと説明の時間が長くなることや、調べる活動を取り入れても、写してまとめることに多くの時間を費やし、考えさせる時間が取れなくなってしまうことが多いためであると考える。

そこで、歴史的事象の意味を考える力を高めるために、児童の疑問を生かした学習問題を設定し追究していく、問題解決的な学習が必要であると考える。

初めに、「なぜ」で始まる学習問題を設定し、その予想を立てる。そして、予想の根拠となるような歴史上の人物に関する事実を調べ、学習問題に対する自分の予想が正しいか考える。根拠となる事実が見付からない場合は、予想を変更する。根拠となる事実が見付かった場合は、根拠となる事実がさらにないか調べ、必要に応じて予想を修正する。このように、常に予想を立てそれを検証するということを繰り返す。さらに、「まとめる」過程で、追究してきたそれぞれの結果を関連付ける活動を行う。このような問題解決的な学習を進めれば、予想をそれぞれの単元のねらいである歴史的事象の意味に近付ける思考過程を取ることになり、歴史的事象の意味を考える力が高まるであろうと考える。

問題解決的な学習は児童が主体となって展開する学習である。その際、学習問題を設定し、予想を立て、調べ、まとめるまでの学習の進め方、また、資料から歴史上の人物の行動の目的などを調べる際の視点、さらに、調べる際に言葉の意味が分からずつまずいたときに活用できる用語集、などが書かれている歴史学習ガイドを使いながら学習を進めれば、より主体的に学習に取り組むことができると考える。

以上のことから、本研究では、歴史学習ガイドを使った「なぜ型学習」を取り入れることによって、歴史的事象の意味を考える力が高まると考え、上記のような主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

小学校歴史的分野の学習において、歴史的事象の意味を考える力を高めるために、歴史学習ガイドを使って、「なぜ」で始まる学習問題を設定し、予想と検証を繰り返す活動を取り入れた「なぜ型学習」を進めることの有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　「つかむ」過程では、歴史学習ガイドを使って、歴史上の人物にかかわる資料を比較し、相違点に着目することによって、「なぜ型学習」における学習問題を設定し、既有知識を基にした予想を立てることができるようになるであろう。

2　「追究する」過程では、歴史学習ガイドを使って、「なぜ型学習」における学習問題の予想の根拠となる事実について調べ、予想が正しいか検証する活動を繰り返すことによって、根拠となる事実を基にした検証結果である自分の考えをもつことができるようになるであろう。

3　「まとめる」過程では、歴史学習ガイドを使って、「なぜ型学習」における学習問題について予想と検証を繰り返して得た、それぞれの検証結果を関連付けることによって、人物の行動の影響や役割が分かり、歴史的事象の意味を考える力が高まるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　歴史的事象の意味を考える力について

本研究では、歴史的事象を、「児童が学習する歴史上の様々な人間の行動すべてと、それにかかわるできごとや事柄」とした。そして、歴史的事象の意味を考える力を「歴史上における人間の行動について、まわりの状況やほかの人間の思いや行動との関係から見えてくる、その時代や後の時代に至るまでに与えた影響や役割について考える力」ととらえた。この力は、学習問題に対する自分の予想が正しいか資料を基に検証する活動や、その活動によって得た複数の検証結果を因果関係や共通点で関連付ける活動を通し、資料から事実を発見する力や結果を意味につなげる力の高まりに伴って高まっていくものと考える。

2　「なぜ型学習」について

「なぜ型学習」とは、歴史的事象の意味を考える、問題解決的な学習のことである。歴史的事象の意味を考えるために設定される学習問題を、「なぜ」という表現で表すものとする。「なぜ」で始まる学習問題を設定することによって、その後の学習活動は、歴史的事象の原因となる背景や目的を予想し、その予想が正しいかを追究する学習になる。そして、「なぜ」で始まる学習問題は、歴史的事象の意味に迫る資料を基にした児童の疑問から設定される。

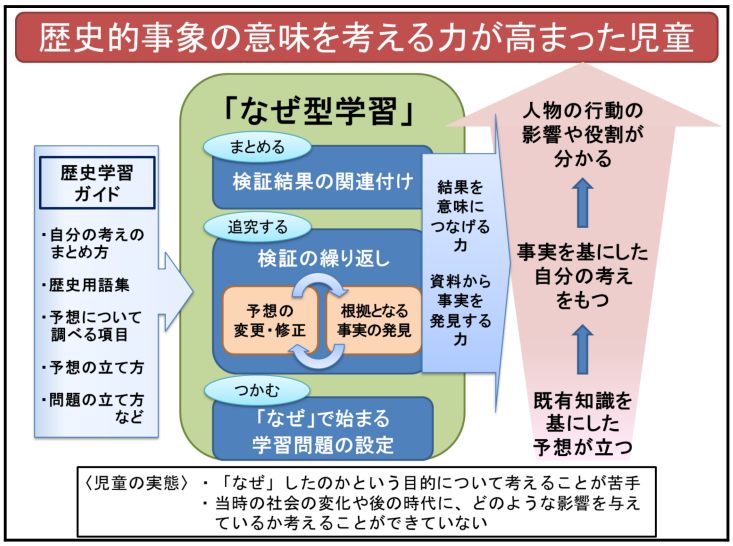


図1　研究構想図

「なぜ型学習」では、予想が正しい

か検証する活動を行う。これは、学習問題の答えを予想し、その予想が正しいか、根拠となる事実を資料から発見し、さらに、発見した事実を基に予想を変更・修正していく活動のことである。

予想には、段階がある。学習問題から最初に予想できる内容は、既有知識を根拠にしたものであり、おぼろげな予想になることが多い。そのおぼろげな予想について資料から根拠となる事実が発見できなければ、その予想を変更する。根拠となる事実を発見できたときは、その予想は正しいことになる。根拠となる事実をさらに発見すれば、より一層その予想の正しさを証明することになる。一方、根拠となる事実が増えていくと、もともと考えていた予想よりも広い見方や深い見方に気付くこともある。その場合は、予想もより高次の予想へと修正される。予想の修正を繰り返す活動の中で、児童は、歴史的事象の原因となる背景や目的、あるいは歴史的事象の結果について多くの事実を見いだし、それを基に、学習問題に対する自分の考えとすることになると考える。

単元の終盤に、これまでの検証で得た自分の考えである複数の検証結果を、因果関係や共通点がないか検討して関連付ける。これにより、歴史的事象が、当時の社会や後の時代に与えている影響や役割が分かり、歴史的事象の意味について考える力を高めることができると考える。

３　歴史学習ガイドについて

歴史学習ガイドとは、児童が「なぜ型学習」を進めていく上で活用する学習の手引きである（図２）。歴史学習ガイドには、学習問題を設定し予想を立てる手順や、予想について調べる項目例、自分の考えをまとめつなげる手順などが書かれている。また、調べ学習をする際、言葉の意味が分からずに活動に時間が掛かる面も見られるので、児童がつまずくと予想される言葉について、簡単な言葉で内容を確認できたり、歴史的事象の意味につながる事実を手軽に見付けたりできる「歴史用語集」を付ける。学習のそれぞれの過程でこの歴史学習ガイドを使い、主体的に学習を進めることができるようにすることをねらいとしたものである。一方で、この歴史学習ガイドは、指導者にとっても問題解決的な学習を進める際に参考になるものと考える。

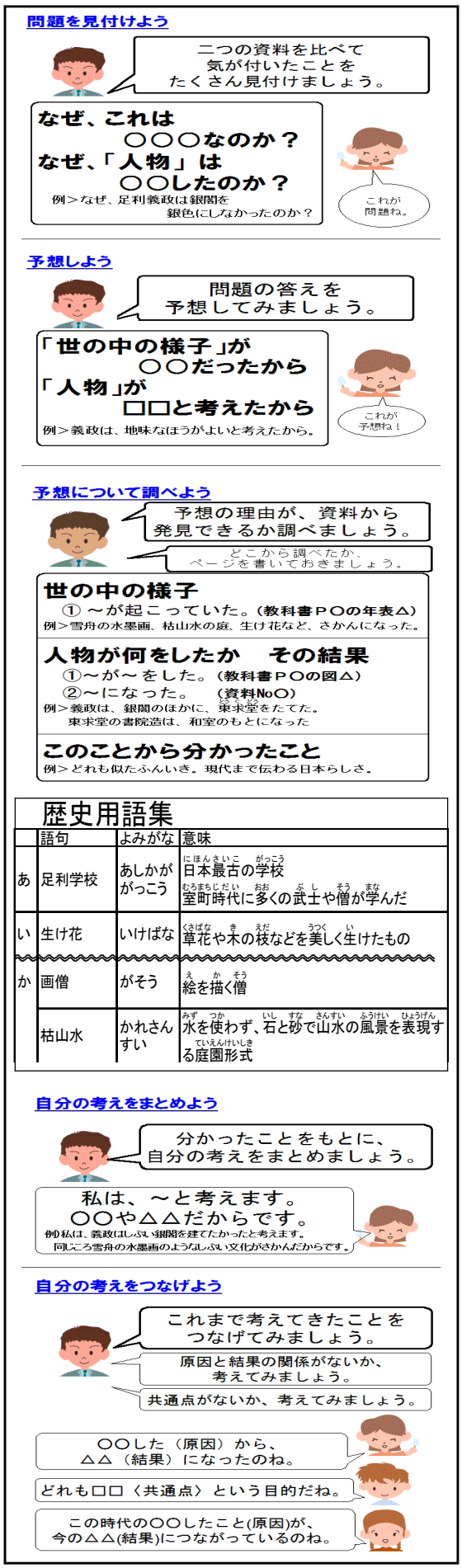


図2　歴史学習ガイド（抜粋）

Ⅴ　研究の計画と方法

1　実践計画

対　　象	研究協力校　小学校第６学年　33名
実践期間	平成23年10月７日～10月21日　６時間
単 元 名	「明治維新」

2　抽出児童

A	歴史的人物の行動についてその目的について考えることができていない。友達と協力しながら、予想が正しいか根拠となる事実を調べる活動を繰り返すことによって、人物の行動の目的に気付くことができるようにし、歴史的事象の意味について考える力を高めていきたい。
B	歴史的人物の行動についてその目的について考えることはできるが、その時代や後の時代に与えた影響まで考えることはできていない。根拠となる事実から予想を検証する活動を繰り返し、それにより得た複数の検証結果を関連付ける活動をすることによって、人物の行動の影響や役割が分かるようにし、歴史的事象の意味について考える力を高めていきたい。

3　検証計画

検証項目	検　証　の　観　点	検証の方法
見通し１	「つかむ」過程で、歴史学習ガイドを使って、歴史上の人物にかかわる資料を比較し、相違点に着目することは、「なぜ型学習」における学習問題を設定し、既有知識を基にした予想を立てるのに有効であったか。	ノートの記述 活動状況の観察 記録用ビデオ 振り返りカード 事後アンケート
見通し２	「追究する」過程で、歴史学習ガイドを使って、予想の根拠となる事実について調べ、予想が正しいか検証する活動を繰り返すことは、根拠となる事実を基にした問題に対する検証結果である自分の考えをもつのに有効であったか。	
見通し３	「まとめる」過程で、歴史学習ガイドを使って、学習問題について予想と検証を繰り返して得た、それぞれの検証結果を関連付けることは、人物の行動の影響や役割が分かり、歴史的事象の意味を考える力を高めるのに有効であったか。	

4　単元の目標及び評価規準

(1)　単元の目標

黒船の来航、明治維新、富国強兵、文明開化などについて調べ、明治政府が廃藩置県や四民平等などの諸改革を行い、欧米の文化を積極的に取り入れながら、日本の近代化を急いだことが分かる。

(2)　評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
黒船の来航とその後の世の中の動きに関心をもち、「なぜ」で始まる学習問題について、意欲的に調べている。	「なぜ」で始まる学習問題について追究し、根拠となる事実を基にした自分の考えをもてている。	学習問題についての予想の根拠となる事実について、資料などを活用して調べ、ノートに記録している。	黒船の来航をきっかけに江戸幕府が倒れてできた明治政府が、欧米の文化を取り入れながら、諸改革を行い、近代化を進めたことを理解している。

5　指導計画

過程	時	学　習　活　動	研　究　上　の　手　だ　て
つかむ	1 2 3 4	○学習問題を設定する。 ＜各時に学習する歴史的事象と学習問題例＞ ①ペリー来航 「なぜ幕府はアメリカと戦わなかったのか」	○複数の資料を提示し、比較して相違点を見付け、それを基に「なぜ」で始まる学習問題を設定する。 ○歴史学習ガイドを使って、学習問題の基本文型

	5	**②大政奉還** 「なぜ西郷たちは幕府を倒したのか」 **③遣欧使節団** 「なぜ大久保たちは２年も欧米を巡ったのか」 **④文明開化** 「なぜ18年で急に欧米化したのか」 **⑤富国強兵** 「なぜ政府は富岡製糸場を建てたのか」 ※１時間ごとに一つの学習問題について追究する。 ○学習問題について予想する。 ①アメリカが強いから負けるかもしれないと思ったから。 ②幕府のやることが気に入らないから。幕府が頼りないと思ったから。 ③欧米の知識を手に入れたかったから。 ④人々が、西洋に興味をもったから。 ⑤良質の生糸をたくさん作りたいから。	を確認し、学習問題を考えるよう伝える。 **なぜ、「人物」は○○したのか？** ○既有知識を振り返ったり、学習問題を設定する際に提示した資料の着眼点を示したりして、予想を立てやすいようにする。 ○追究の過程で、根拠となる事実が見付からなかったときは、予想を変更・修正しなければならないことを伝える。 ○歴史学習ガイドを使って、予想の基本文型を確認し、予想を立てるように伝える。 **「世の中の様子」が○○だったから** **「人物」が□□と考えたから**
追究する		○調べる計画を立て、予想について調べ、交流し、自分の考えをもつ。 ①黒船の威力やペリーの強い態度に押されて開国し、後に貿易が始まった。 ②貿易後の物価高で幕府への不満が高まり、薩・長を中心に倒幕の動きが強まったので、慶喜は政権を朝廷に返した。 ③不平等条約の改正は失敗したが、欧米について多くの知識を得た。 ④政府が、欧米文化を積極的に取り入れる政策を進めたので、欧米化が進んだ。 ⑤欧米の技術を学んで広める富国強兵政策を進めて、欧米のような豊かで強い国を目指した。 ○廃藩置県や四民平等について調べる。	○予想の根拠となる事実を資料から調べ、予想が正しいか検証し、予想を変更・修正する。 ○お互いの考えを出し合い、予想を変更・修正したり、協力して根拠となる事実を調べたりしてよいことを伝える。 ○どの資料の、どの部分から調べたか、資料名やページなども必ず記録しておくよう促す。 **どこから調べたか、ページを書いておきましょう。** ○根拠となる事実を確かめられるような補助資料も用意し、全員に配付しておく。 ○言葉の意味でつまずいている児童には、歴史学習ガイドの「歴史用語集」を参考にするよう伝える。
まとめる	6	○これまでの検証結果を関連付ける。 ＜学習問題＞ 「政府はどのような国づくりを目指したのか」 ①と②→原因と結果 ペリー来航で欧米の力を知る→ 開国し貿易を始めた→物価上昇→ 幕府に対する不満→ 倒幕運動・世直しの動き→大政奉還 ③と④と⑤→共通点 ・早く欧米に追い付きたいという目的 ①②と③④⑤→原因と結果 欧米の力を知り倒幕→ 欧米のような国を目指す	○検証結果を関連付ける学習問題は、教師が設定する。 ○第１時から第５時までの「なぜ型学習」の結果（行動の背景となっている歴史上の人物の考え、目的）を振り返り、因果関係や共通点に着目させ、板書して整理する。 ○これまでの検証結果を振り返りやすいように、第１時から第５時までのノートにインデックスを付けておく。 ○歴史学習ガイドを使って、因果関係や共通点に着目して、学習問題に対する自分の考えをまとめるよう促す。 **○○した（原因）から、△△（結果）になったのだね。**

Ⅵ　研究の結果と考察

1　「つかむ」過程における資料を比較する活動の有効性について

(1)　結果

第５時までの「つかむ」過程では、歴史学習ガイドの「なぜ、～は」で始まる学習問題、「～が□□と考えたから」という予想の基本文型を参考にして、複数の資料を比較する活動を通して疑問に感じたことを基に、学習問題を設定し、予想を立てた。その際、学習問題の主語をだれにするのか指定した。

第１時では、「ペリー来航に対し緊迫した様子で戦いの準備をする幕府側を描いた錦絵」と「黒船甲板上で食事をしている幕府代表団とペリー一行の絵」を比較し、戦いの準備をしていた幕府がアメリカ人と仲良く食事をしていることを疑問に感じて「なぜ幕府は～」で始まる学習問題を考え、「なぜ幕府は戦わなかったのか」「なぜ幕府の役人はアメリカ人と食事をしているのか」のいずれかのタイプの学習問題を設定した。細かな表現の違いはそのままにし、食事をしていることと戦わなかったこととは同じであることを確認した。

第２時では、プレゼンテーションとして加工した「大政奉還を伝える徳川慶喜の絵」と「この時代に活躍した人物肖像一覧」を比較し、「なぜ西郷隆盛たちは～」で始まる学習問題を考え、文末が多少異なるものの全員が「なぜ西郷隆盛たちは幕府を倒したのか」という学習問題を設定した。

第３時では、プレゼンテーションとして加工した「倒幕運動を進めた、西郷、大久保、木戸、岩倉４名の顔写真」と「欧米へ２年も出かけた、大久保、木戸、岩倉３名の写真」を比較し、「なぜ大久保たちは～」で始まる学習問題を考え、「なぜ大久保たちは、２年も掛けて欧米の国々を巡ったのか」「なぜ大久保たちは、２年間も日本からいなくなってしまったのか」という学習問題を設定した。

第４時では、プレゼンテーションとして加工した「幕末の江戸を描いた絵」と「それより60年以上前の江戸の絵」や「それより18年後の明治時代初めの絵」を比較し、「なぜ60年間変化がなかったのに18年間で欧米化したのか」という学習問題を設定した。

第５時では、「座繰りの写真」と「富岡製糸場の錦絵」を比較し、「なぜ政府は～」で始まる学習問題を考え、「なぜ政府は富岡製糸場を建てたのか」という学習問題を設定した。

それぞれの学習問題について立てた予想は、表１のとおりである。多くの児童が、抽出児童Ａ・Ｂのように、前単元や前時の学習から得た既有知識（資料１〰線部）、あるいは学習問題設定場面で提示した資料等から得た既有知識（資料１＿線部）を基にして、予想を立てることができた。数名は、最初の予想を書いていなかったが、資料の読み取りが進むと、友達の発表を参考にしながら、自分の考えをもつことができた。

資料1　抽出児童の最初の予想

第１時
Ａ：今までアメリカとの交流がなかったから。ペリーの態度が強いから、戦いをやめて、交流を深めたいと考えたから
Ｂ：幕府はペリーの言うとおり開国した方がいいと考え直したから。なぜなら開国すれば、ほかの国との交流も増えていろんな文化が取り入れられると思ったから

第２時
Ａ：幕府のやることが気に入らなくて幕府を倒したいと考えた
Ｂ：西郷たちは権利を奪って国を治めたいと考えたから

第３時
Ａ：大久保たちは、外国の政治などを日本に取り入れたいと考えたから
Ｂ：大久保たちは、欧米の技術を取り入れようと思ったから

第４時
Ａ：欧米化したのは、政府が欧米の進んだ文化を取り入れ、人々が興味をもったから
Ｂ：欧米化したのは、外国との交流や貿易が始まったから

第５時
Ａ：政府は、品質のよい生糸を作る技術を向上させようとしたから
Ｂ：政府は、たくさん糸を生産して外国に売り、お金を稼ごうと考えたから

(2)　考察

導入の資料の内容や提示方法が重要で、比較の対象の変化や、既有知識とのギャップが大きいほど、「なぜ違うのか」疑問に感じる気持ちも大きくなり、「なぜ」で始まる学習問題が立てやすくなると考える。また、学習問題の主語をだれにするか指定することによって、個々の学習問題がほ

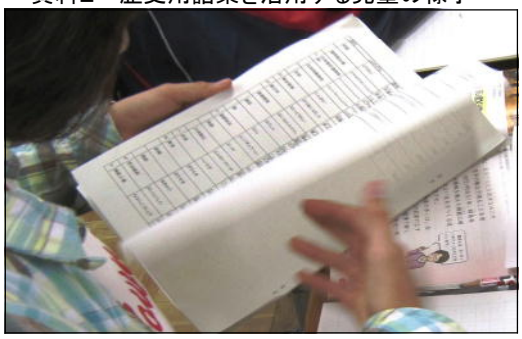
ぼ同じ内容にそろい、その後の学習活動をスムーズに始めることができたと考える。

そして、前時を振り返るための資料や、学習問題設定の場面で提示した資料を、比較する活動を行ったことによって既有知識を想起し、歴史学習ガイドの基本文型を参考にして、ほとんどの児童が、既有知識を基にした予想を立てることができたと考える。

また、「なぜ型学習」は、個々の考えを基に学習問題を設定したり予想を立てたりするため、学習問題設定や予想を立てることに慣れていない段階では、歴史学習ガイドの基本文型を示すことは有効であると考える。

このように、歴史学習ガイドを使い、歴史上の人物にかかわる資料を比較して相違点に着目したことによって、「なぜ」で始まる学習問題を設定し、既有知識を基にした予想が立ち、その予想を検証する活動につなげていく見通しが立ったと考える。

資料2　歴史用語集を活用する児童の様子



2　「追究する」過程における予想を検証する活動の有効性について

(1)　結果

「追究する」過程では、教科書や資料集とは別に教師が用意した資料プリントを基に予想を変更・修正する活動を行った。根拠となる事実が、どの資料の、どの部分か、その事実を基に予想を変更・修正すべきか、歴史学習ガイドの文例を参考にして検証していた。また、意味の分からない言葉を歴史学習ガイドの「歴史用語集」を使って調べている様子が多く見られた（資料２）。最初の予想を書いていなかった児童も、友達の発表を参考に自分の予想を立て、それについて検証する活動を進めることができた。

第１時、抽出児童Ａは、「大砲の数や射程距離比べ」の資料から、アメリカの威力にかなわないから戦うことをやめたという考えをもった。また、抽出児童Ｂは、「黒船が蒸気船であること」の資料から、技術力に着目した考えをもった（資料３）。

第２時、抽出児童Ａは、「貿易開始後の米や生糸の物価の変化」の資料から、幕府に対する経済的不満に着目した考えをもった。また、抽出児童Ｂは「薩英戦争や下関砲台占領と武士たちの考えの変化」「世直し一揆と農兵隊」の資料から、外国と戦った武士たちの考えの変化や、世直しの一揆が起こり、それを幕府や藩が自力では抑えられなかった事実を発見し、幕府の弱体化に着目した考えをもった（資料３）。

第３時は、抽出児童Ａ・Ｂ共に、「五か条のご誓文」「大久保による、工業の盛んな英国の様子を伝える手紙」「外交官による、条約改正が欧米から相手にされなかった旨の手紙」の資料や不平等条約についての教科書の記述から、条約改正は失敗したが、欧米の多くの知識を得たという考えをもった（資料３）。

第４時、抽出児童Ａは、「高村光太郎の詩（ちょん

資料3　抽出児童が記述した自分の考え

第１時
Ａ：幕府はアメリカの力にはかなわないと思って、戦いをやめて交流を深めたいと考えたから
Ｂ：幕府は戦ったら負けるだけだと思っていた。なぜかというとアメリカは日本の何倍もの技術力をもっていたから

第２時
Ａ：西郷たちは、幕府に生活を苦しくされ、開国した幕府に対する不満が高まり幕府を倒した
Ｂ：西郷たちは、幕府中心では外国に通用しないし、幕府のやり方が気に入らなくて自分でどうにかしようと考え、幕府を倒した

第３時
Ａ：大久保たちは、外国の政治を日本にも取り入れたいと考えたから欧米の国へ行ったが、条約改正が果たせなかった。けれど、政治や経済の仕組み、産業技術など多くの知識を得た
Ｂ：大久保たちは、条約改正ができなかったが、２年掛けて欧米を視察し、技術を得て帰国した

第４時
Ａ：欧米化したのは政府が欧米の進んだ文化を取り入れ、人々が興味をもち、文明開化によって世の中はわずかの間にぐんぐん開いた。けど、仕方なくした人もいる
Ｂ：ここまで急に欧米化したのは、西洋の知識をもっている福沢諭吉や、明治天皇が西洋文明を取り入れたため、人々も興味をもち、急激に広まっていった

第５時
Ａ：政府は、産業や文化を欧米並みにする資金を生糸の輸出で得ることを考えたから。技術を教わるために明治政府がブリューナーを雇った
Ｂ：輸出が目的。そこで技術を学んだ人たちは地元にもどり指導した。政府は外国に追い付きたいと考え、富国強兵を進めた

まげ)」「文明開化にかかわる政府の出した命令」の資料から、明治天皇の散髪を理由に仕方なくちょんまげを切った人や、学制などの政府の命令で文明開化が進んだことを発見して、政府が積極的に推進したという考えをもった。また、抽出児童Ｂは、「学問のススメと福沢諭吉」の資料を根拠に、知識人や天皇の役割も加えた考えをもった（資料３）。

第５時、抽出児童Ａは、教科書の記述や、「生糸の輸出額増加」「最新のフランス製機械の導入」「フランス人技師ブリューナー」の資料から、品質向上のために欧米の技術を導入したことに着目した考えをもった。また、抽出児童Ｂは、「富岡製糸場を模範工場としてできた製糸工場」「女工和田英の年表」の資料から、模範工場であることや、女工が指導者になっていることを発見し、それを根拠に、技術を国内に広めることに着目した考えをもった（資料３）。

また、最初の予想と、授業の終わりまでにもてた自分の考えの記述を見て、本時のねらいに照らして「おおむね満足できる状況」をⒷ、「十分満足できる状況」をⒶ、「努力を要する（誤った記述）状況」をⒸ①、「努力を要する（未記入）状況」をⒸ②として四つに分類したところ、右のような変容が見られた（図3）。

(2)　考察

友達の立てた最初の予想を参考に、検証する活動を進めたⒸ②の児童については、補助資料配付後に資料中の語句でつまずいていないかを見て回り、歴史学習ガイドの「歴史用語集」を見て確認するよう促したことや、資料から何が読み取れるかを一緒に確認することによって、学習問題の解決に関係のある事実を発見し、授業の終わりまでには全員が自分の考えをもつことができたと考える。

まず、最初の予想がⒸ①の児童が、Ⓑの状況に高まったのは、資料から根拠となる事実を発見できず予想に誤りがあると分かり、発見した新たな事実を基に予想を変更できたからであると考える。

既有知識を基にⒷの予想を立てられた児童も、第２時の抽出児童Ａのように、新たな事実を資料から発見し、それを根拠とした自分の考えに修正できた。これは、資料から根拠となる事実が発見できないか調べることによって、自分の予想が正しいことを確かめることができたからだと考える。

また、Ⓑの予想からⒶに高まった児童だけでなく、Ⓒ①の予想からⒶに高まった、第１時や第４時の抽出児童Ｂのような児童も見られた。これは、ほかの資料から、さらに根拠となる事実が発見できないか調べることを繰り返したためであると考える。

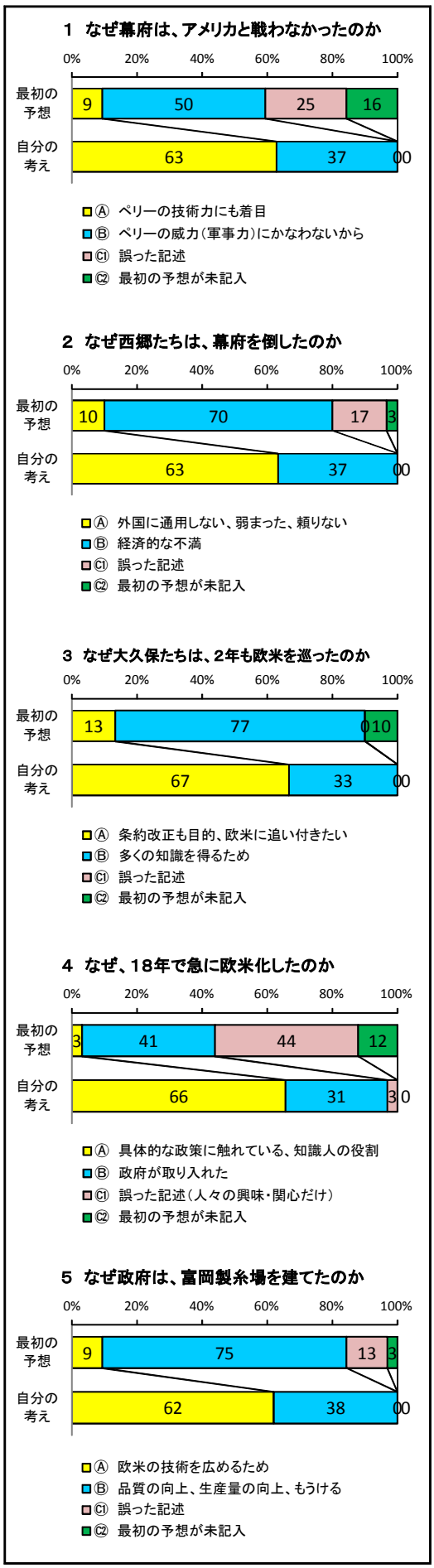


図3　最初の予想から自分の考えへの変化

これらは、予想の根拠となる事実を増やしていくことによって、既有知識を根拠とした予想の段階から、資料から発見した事実を根拠とした自分の考えをもつ段階にまで高まったと考える。

このように、歴史学習ガイドを使って、予想の根拠となる事実について調べ、予想が正しいか検証する活動を繰り返すことによって、根拠となる事実を基にした検証結果である、自分の考えをもつことができたと考える。

3　「まとめる」過程における検証結果を関連付ける活動の有効性について

(1)　結果

第６時は、これまでに学習してきた歴史的事象について、因果関係や共通点がないかを振り返り、「明治政府は、どのような国づくりを目指したのか」について、歴史学習ガイドの基本文型を参考にして、考えをまとめ、記述した。始めるまでに時間が掛かった児童がいたものの、これまでの自分の考えを振り返りながら、記述できた。

まとめの文章の中で、抽出児童Ａは、アメリカの威力にかなわず戦いをやめた後、貿易が始まり米価が高騰したこと、生活苦から幕府に対する不満が高まって、幕府が頼りないと考えた西郷隆盛たちが幕府を倒したことを、学習してきた順を追って文章に表現している（資料４〜線部）。抽出児童Ｂも、アメリカの技術に圧倒された幕府が開国したことにより、物価が高くなって不満の声が上がると、幕府のやり方が気に入らなかった西郷たちが、幕府を倒し、江戸から明治となったと記述している（資料５〜線部）。ほかにも、「まずはペリーが来て、戦っても負けるとあきらめ、アメリカと貿易をし、開国もする」「アメリカと貿易をしたせいで生活が物価高になり、必要のない幕府を倒すと考えた」「だから政府は欧米に追い付きたいと考え、大久保らが日本から離れた」など、明治以降の学習内容まで、因果関係で関連付けた記述が見られた。このような記述が見られたのは、全体の87％であった（図４）。

また、文章の後半には、第３時から第５時までの検証結果を基にした記述も見られた。抽出児童Ａは、「外国の技術や知識」を取り入れるという共通点で、歴史的事象を関連付けて記述している（資料４‥線部）。抽出児童Ｂは、「明治政府中心の国づくりが進められた。政府が中心となった日本は、欧米からの技術を取り入れて」と記述し、文明開化や、富岡製糸場、徴兵令などの歴史的事象を、明治政府の積極的な欧米文化の導入という共通点で関連付けている（資料５‥線部）。このような、共通点について記述

資料4　抽出児童Aのまとめ

ペリーは外国とのつき合いを制限していた幕府に開国を求めました。それでアメリカと幕府での戦いが始まりました。けどアメリカの力にはかなわないと思い戦いをやめました。その後西郷隆盛たちは幕府がたよりないと考えました。外国との貿易が始まり米などの値段が上がってしまい、幕府に生活を苦しくされ不満が高まり、幕府をたおしました。明治政府は、外国の政治を取り入れ、日本にも取り入れたいと考え、欧米の国へ行き、技術や知識を得た。福沢諭吉などは、西洋の新しい知識を身につけた人々により、生活を大きく変えました。政府は、富岡製糸場を建てました。富岡製糸場を模範工場として、後にできた工場もありました。技術を教わるために、明治政府が、ブリューナーというフランス人をやとい、ブリューナーの給料はとても高かった。給料は、税金、地租改正で安定した。日本は、欧米のような強い国をめざしました。

資料5　抽出児童Bのまとめ

日本にペリーが来航し、幕府はその技術にあこがれ開国、貿易をした。そのことを日米和親条約という。そして開国をしたことにより、物価が高くなっていろんな人たちから、不満の声があがった。するとそのやり方が気に入らなかった西郷たちは、自分たちでどうにかしようと幕府をたおし、江戸から明治となった。明治になってからは明治政府中心の国づくりが進められた。政府が中心となった日本は、欧米からの技術を取り入れて江戸を中心に欧米に近い町になっていった。それを文明開化という。その後も政府は糸を輸出しお金をかせごうと考え、富岡製糸場をつくった。そこで技術を学んだんたちは地元へ戻りしどうをした。良い製品を作り外国に追い付きたいと考えた。そして強い軍隊をつくり欧米に負けたくないと考えた。このように日本は、欧米の進んだ技術を取り入れ、日本を先進国にし欧米のような高い知識を持っている国にしたいと考えた。

が見られたのは、全体の97%であった（図４）。

さらに、抽出児童Ａは、最後に「日本は、欧米のような強い国を目指しました」と結論付けている（資料４＿線部）。抽出児童Ｂは、「日本は、欧米の進んだ技術を取り入れ、日本を先進国にし欧米のような高い知識を持っている国にしたいと考えた」と結論付けている（資料５＿線部）。このように、31名中30名の文章から、「早く欧米に追い付こうとした」「欧米に負けない国にした」「知識を取り入れた政治をした」「華やかな国を目指した」「豊かな強い国にしたい」「技術や文化の進んだ国や政治が進んだ国を目指した」など、単元のねらいを達成し、歴史的事象の意味をとらえた記述が見られた。

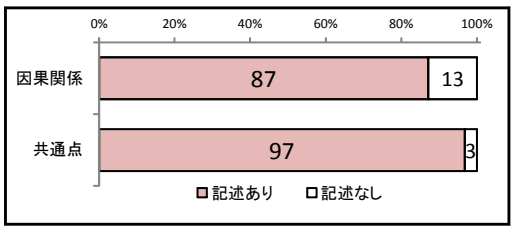


図４　関連付けた記述が見られる児童の割合

(2)　考察

文章のまとめ方に戸惑いながらも、多くの児童が、「ペリー来航がきっかけとなって、圧倒的な技術力をもつ欧米との交流が始まる中､新しい時代に通用しない幕府にかわって明治政府ができた」ことを記述している。これは、第１時や第２時の学習で、ペリー来航の影響や倒幕の原因について検証しているので、それらを因果関係で関連付けたことによって分かった結果であると考える。

また、多くの児童が、「明治政府が欧米化を積極的に進めたこと」について記述している。これは、第３時から第５時の学習で明治政府の政策の目的について検証しているので、それらを「欧米の文化や仕組みの積極的な導入」という共通点で関連付けて分かった結果であると考える。そして、多くの児童が、抽出児童Ａ・Ｂのように、まとめの文章前半部分と後半部分を関連付けることによって、欧米のような国づくりを目指したという結論に至ったと考える。

これらは、「なぜ型学習」が、「歴史的事象の原因となる背景や目的」を予想し、その予想の根拠となる事実を資料から発見できるか検証する学習であるため､予想の根拠となる事実が増えた後、検証結果を関連付けることによって、「欧米のような国づくりを目指す」という明治政府の目標について、複数の面から理解することにつながったと考える。

以上のことから、「なぜ型学習」における学習問題について予想と検証を繰り返して得た、それぞれの検証結果を関連付けることによって、学習してきたことが「日本の近代化を進める」という影響をもっていたと分かり、歴史的事象の意味を考える力が高まったと考える。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

○　「なぜ型学習」を行うことによって、児童は、資料から新たな事実を発見して、それを増やしていくと共に、事象同士の因果関係や共通点に気付き、歴史的事象が当時の社会の変化や後の時代に与えた影響や役割である歴史的事象の意味を考える力が高まった。

○　歴史学習ガイドは、児童が学習問題を設定し、予想を立て、その予想を、資料から得た事実を基に変更・修正する際の参考として役立つと共に、新たな事実を発見するために必要な語句の意味調べにも使えることが分かった。

２　課題

○　「なぜ」で始まる学習問題例と、その基となる児童の疑問を生む資料を開発する必要がある。

○　すべての児童が、因果関係や共通点を基にまとめの文章が書けるような文例や、「歴史用語集」の拡充など、歴史学習ガイドの内容をさらに改良していく必要がある。

＜参考文献＞

・小原　友行　編著　『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン』　明治図書(2009)

（担当指導主事　渡邉　敬子）